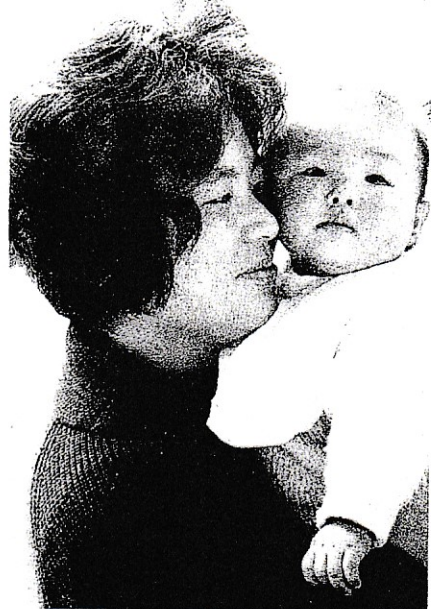


わが心の自叙伝

菅原洋一

▷14

妻アケミさんと
長女の歌織ちゃん

1963(昭和38)年、「若い日本」「東京五輪音頭」は競作だったが、11月になって自分

だけのための初オリジナル曲「若い命よいつまでも」という歌が発売になった。その意味では、私の実質的なデビュー曲といつてよいが、ちょうどこの発売の同時期に、妻から「赤ちゃんができたかも」と報告された。まさに「若い命よいつまでも」である。

レコードは当時、表と裏面があったが、その裏に収録されたのが「夢見るつぼみ」という歌だから、まさに生まれてくる新しい命への祝いの歌のように思えてならなかった。子供のためにも一生懸命歌ってヒットさせなくては…と緊張したものだ、そうは問屋が卸さない。それでもやっとなんて売されるレコードと子供の報告をしたら、両親たちは実に喜んでく

下積みの日々

れた。

後で聞いた話だが、その当時加古川には数軒レコード店があったが、両親は私のレコードが出るたび発売日にその全店を回って買い占めてくれていたようだ。学校を出たきり、東京から帰ってこない息子はいい、何をしているのか？を、やっとなんてわかってくれたのだと思う。レコード発売は最たる証しだった。それと同時に新しい命の誕生である。

64年7月7日、私は父親になった。女の子だった。名前は「歌織を織りなす」と書いて、「歌織」と名付けた。歌織の誕生が、両親とのつき合いの再始動ともなったのである。私は「若い命よ

いつまでも」以来、歌織が生まれるまでの数カ月間に「むらさき色の人」「鈴懸の雨」「青い小径」と3作ものレコードを発売した。ところが一向にヒットしなかったのである。小澤音楽事務所と契約を始めていたが、テレビやラジオの仕事があるわけでもなく、私はクラブ歌手として生計を立てていた。

妻のアケミがある日、小澤社長に向かつて「どうしてあんな

にうまいのに洋一さんは売れないの？ テレビに出して宣伝してちょうだいよ」と願ひ出たところがあつたらしい。すると小澤は「売り込みは、しっかりやってるんだよ。みんな歌は認めてくれるんだけどね。テレビ向きじゃないって言われちゃうんだ」と教えられ言葉がなかったという。

そんなこんなで東京・品川のホテル高輪の中にある「トロピカルラウンジ」という場所で私

は歌っていた。そこには、私の「知りたくないの」の後「コモエスタ赤坂」などをヒットさせる若き日のロス・インディオスもいた。

アケミは妊娠中、ひどいつわりで、ご飯もろくにのどを通らなかつた。彼女の夕食を作ってから高輪の店に出たが、閉店が夜の3時ごろだから、家に戻ると4時はすぎた。ちよつと仮眠をとってから起き出して彼女の朝食を作り、昼食も起きて作る毎日だった。

元氣な赤ん坊を産んでくれるよう、できるだけのことをしただけだったが、確かに限界は近づいていた。物が食べられないアケミは痩せてきたし、私も主夫と夜の仕事の掛け持ちに疲れ出した。しかし、いざ子供が生まれてくるとその顔、その声に一喜一憂。2人ともそんな苦しみの日々など、すぐに忘れてしまった。

(すがわら・よういち=歌手)

長女誕生、苦労も吹き飛ぶ